

9月23日
参列者 400名



世田谷
特攻観音年次法要

報 特攻
平成12年11月



第45号

〒105-0001 東京都港区
虎ノ門3-6-8 第6森ビル
財団法人 特攻隊戦没者
慰霊平和祈念協会
電話 03(3432)1090
FAX 03(3432)5567

編集人 田中賢一
発行人 木村元正

目次

世田谷特攻観音年次法要 1
 八月十五日の靖国神社 2
 特操出身者は語る 3
 特攻隊員の手紙② 13
 戦没者追悼式における首相式辞 17
 薫空挺隊始末記 18

井上二飛曹の出撃前夜 23
 大西滝治郎の思想を承けて 25
 協会発行の書物等の頒布 25
 義烈空挺隊員の遺墨② 26
 年次法要献吟関連 28
 小学生の作文 28



焼香の列



池の中の観音



八月十五日靖国神社

首相が替ったので、あるいはと淡い期待を抱いたが、この人も駄目。しかし心ある国民の参拝は踵を接している。英霊にこたえる会と日本会議共催の中央国民集合は、二千五百名の参集を得て行われた。

午前10時30分、定刻どおり、国学院大学大原教授司会のもとプログラムに従って進められた。

始めに大原教授開会の辞あり、次いで前奏に伴い国歌2回斉唱、靖国神社拝礼は花田権宮司先導で行われた。

次に終戦の詔書玉音の録音放送を拝聴した。陛下のお言葉は今拝聴しても心に沁みわたる。

つづいて主催代表堀江正夫「英霊にこたえる会」会長は靖国神社に関する野中発言(主に分祀問題)について語気鋭く批判。また自国の英霊には国家元首が礼を尽すのが当然であり、何ら他国に気兼ねすべきものではない。中国に迎合するような野中発言は許せない。首相の公式参拝こそ急務であり、国として態度を鮮明にすべき第一歩であると強く主張した。

次に石井公一郎日本会議副会長が立ち、願っているだけでは平和を実現でき

ない。それには日本を怒らせると恐いぞという認識を周囲に与えることが必要だ。自分の国は自分で守る意識を醸成しなければならぬ。日本人の心を取戻す教育が重要であり、その為には教育基本法の抜本的改革が欠かせない。これらの運動に対し、英霊のご加護があると信ずる…と結んだ。

次いで各界を代表して百地章日本大学教授は首相参拝は大半の国民が支持していると訴え、藤岡信勝教授は正しい歴史教育の提言、飛び入りの俳優藤岡弘氏からは国を愛し、人を愛し、我が国の文化、伝統を取戻そうと熱っぽく語り、そして最後に板垣正元参議院議員は、靖国問題について国としての基本姿勢を正すべきである。この宿題を實現しようとする努力した骨のある首相は居なかった。むしろ東京都知事の方が立派だ…と檄を飛ばして話しを終えた。

ここで司会者から石原都知事が12時30分頃参拝する旨発表があり、大きな拍手が湧いた。

次いで日本会議の若手会員により声明文が読みあげられ、参会全員の拍手を以て賛同表明がなされた。

本日の集会には二、五〇〇名が参集していると報告され、更に全国縦断キャラバン隊報告が行われ「海ゆかば」の斉唱があつて集会は締められた。



英霊にこたえる会主催の慰霊祭



正午を期して黙禱



集会

特操出身者は語る

平成12年3月25日

借行社に於いて

質問者

松下 文彦 早稲田大学学生 23才

井上 宣重 日本大学学生 25才

浅田 真理 東京芸術大学学生 20才

質問者は金城 和彦顧問に人選を依頼した。

回答者

腰塚 守正

陸軍特別操縦見習士官 1期生出身

田中 市郎衛門

陸軍特別操縦見習士官 2期生出身

全般企画

田中 賢一

司会者 この対談の企画者として冒頭に一言申し上げます、この種の対談は今までに4回実施し、既に会報に掲載済みです。

それは敵艦船に対する航空特攻、空挺特攻、回天、①と震洋の4種類であります。

今回は学徒動員によって、特別操縦見習士官を経て陸軍の航空将校となら

れた二人の会員が現在の大学生の質問に答えるという趣向でやってみようと思えます。

この対談によって、決戦下の将校操縦者養成の実態、当時の学徒の心情等を明らかにし、更にこれらの人の間から輩出した特攻隊員のことまで話を進め、史実を明らかにすると共に、特攻会報の記事として掲載する事により当時の国民、特に知識階級の心情を後世に語りつたえようとするものであります。

今回は専門の速記者によって速記録を作成してもらいますので、忌憚のない発言をなさして下さい。

特操の制度

学生A さきの大戦で我が国が劣勢になった頃「学徒出陣」とかいう記録を見たことがあります、いつどのような法的根拠によって行われたのですか。

田中 「学徒動員」が発展して「学徒出陣」となる訳ですが当時は目まぐるしく制度が変わっておりまして、先ず「学徒動員」からご説明します。

丁度、18年の6月頃わが国の戦況が悪化してまいりまして閣議で「学徒戦時動員体制確立要領」が決定された訳

です、その内容は従来の軍事訓練、私共は「教練」といっていたんですが、本土防衛のための軍事訓練ということ、配属将校の権限が拡大されて、軍事教育の不徹底校は幹部候補生の受験資格を取り消すという権限が与えられました。

またもう一つは当時軍需工場等の生産体制が人員不足等の関係で低下することを防ぐために、女子を含めた勤労動員を実施したわけです。

その頃の学徒は、修業年限は16年に戦争が始まりますと3ヶ月繰り上げになりました、18年には6ヶ月繰り上げと大変厳しい状況でした。

学生A 只今当時わが国の戦況が悪化したということですが、どんな戦局だったのですか。

田中 前年の17年6月のミッドウェー海戦で空母4隻のほか、海軍は優秀なパイロットを多数失いまして、それまでの戦局が一変してしまい、18年2月にはガダルカナル島の撤収、南のタラワ、マキンの守備隊の玉砕、5月にはアッツ島の守備隊が全滅する等、戦局は極めて不利な情勢になりました。加えて同盟国のドイツはソ連の反攻にあつてソ連領内から撤退を余儀なくされまして、イタリーのムッソリーニ首相は辞任に追い込まれ、また山本連合艦

隊司令官が戦死されるなど、戦局は内外共に悪化してまいりました。

学生A 記録をみますと決戦に備えて空中勤務者の確保を図るため予備学生や特操を養成したというように記憶しておりますが。

田中 先ず当時の状況を説明し、特操予備学生というようにご説明したいと思います。当時アメリカでは、太平洋戦争開始後ルーズベルト大統領は航空機年産5万機、パイロット養成は年間2万名という計画を立てて実行に移し



ておりました。

これに対して日本では昭和14年のノモンハン事件の反省から航空兵力の増強の必要性を痛感した陸軍は翌15年から大幅な航空士官の養成を始めたわけです。この年入営した航空士官学校の56期生が18年5月に出生しましたが87名に過ぎなかった、ほかに年間2千6百名を養成した少年飛行兵を加えてもアメリカとの差は大変大きかった、しかも当時は養成には3年から3年半を要したわけです。

そのため早急にパイロットを養成するため高等教育履修者を対象とした特操制度、特別操縦見習士官制度であったわけです、養成期間は短縮されて10ヶ月後には早くも実戦部隊に配属され1年で少尉に任官しました。

海軍の場合は開戦間もなく17年1月には予備学生9期10期、続いて6月には11期12期を採用しましたが両期併せて300名位だったわけです、そこで18年には大量の空中勤務者の養成計画により13期5千人14期3千3百人という養成をしたわけです。同じように海軍兵学校でも75期は前年の3倍の3千5百人を養成しております。

そんな事で特操は18年7月に勅令第655号「陸軍航空関係予備役将校補充職務臨時特令」が交付されまして、海軍

の予備学生制度と同じように消耗度の高い操縦者を養成したわけです。

学生B 腰塚さんは特操1期出身といふふうにお伺いしておりますが、大学は何時卒業なされたのでしょうか。

腰塚 私の場合は昭和19年3月卒業予定でしたが、半年繰り上げになり18年9月25日に卒業式があつて10月1日に特別操縦見習士官になったわけです。

17年頃からスポーツが禁止され国防競技部といつて、剣道、柔道、銃剣術射撃、航空(グライダー、飛行機)等国防に關係のある競技を二つ以上やる様にとつて、私は航空部と銃剣術部に籍をおいて居たので必然的に航空隊に入ったわけです。

特操の訓練

学生B 特操になられてからどのような訓練をされたのですか。

腰塚 私の場合は昭和18年10月1日に熊谷陸軍飛行学校の相模教育隊にはいりました。6ヶ月の訓練が終わつて、20年3月に加古川に参りまして戦闘機の訓練を受けました。戦闘機の訓練が終了して、戦隊に行った戦友と私の様に教官要員として教育に従事したものと別れました、私は教官になりました。2期生の教育を致しました、その時は

知りませんでした。田中さんもいたのですか。

その後旧満州に参りまして、学生航空連盟出身の特操3期生の教育に従事致しました、最後は47振武隊の特攻隊長の命令が出て編成、出撃準備中に終戦になり、それからシベリヤに行きまして4年間捕虜生活をして24年8月に舞鶴に復員したというのが、私の概略の軍隊経歴です。

学生B 特操1期生は何名位採用されたのですか。

腰塚 いろいろな書物に書かれて、2千5百名といわれていますけれど、もう少し多かったです。軍隊も士官学校等は非常に緻密な記録が残っているのですが、予備役の方は割合杜撰で、我々が調べて積み重ねた数字が270名位ではないかという事です。

学生B 先程のお話では入隊してすぐ見習士官になられたのですか。

腰塚 1期生の場合は学生服を脱いでその場で見習士官になりました、曹長の階級です、曹長というのは軍隊では神様で5年も6年も苦勞して曹長になるのですが、われわれは学生服を脱いだらもう曹長で見習士官です、それはよく考えてみると命を賭けて国を守れど、その代わりに階級を与えるという形ではなかったのですかね。



非常に矛盾がありました、実際に飛行機を教えてくれる人はながい期間苦勞をして下士官になった少年飛行兵の人で、飛行機を教わっている間は助教ですから、我々が先に敬礼しますが訓練が終わると、彼らが我々に敬礼をするという様な矛盾がありました。

学生B 大学在学者は一般の兵として入営され、幹部候補生として将校になれるというコースがあったときいていますが、なぜ特操をお選びになったのですか。

腰塚 その頃すでに航空決戦というところで操縦者の養成が急務でした、海軍には予備学生の制度がありまして、私も海軍の予備学生に入るかなというつもりでおりました、実は18年1月に徴兵検査が終わっており12月頃に千葉の騎兵隊に入る予定でしたが、特別操縦見習士官の制度が出来ました、航空部におりましたその頃航空部に派遣されていた教官が「なるべく特別操縦見習士官を受ける様だ」ということで、おきな時代の流れですね、そういうことで入りましたけれど当時はわれわれの様に学校からすぐ入った人ばかりと思っていたのですが、士官学校の助教をしていた人、予備士官学校からきた人、又一般歩兵とか輜重兵から特操の試験を受けてきた人もいたわけです。

学生B 田中さんは特操2期生出身のことですが、いつ入隊されましたのでしょうか。

田中 私は昭和18年12月1日に東部6部隊、正式名称ですと近衛3連隊に入営いたしました。

学生B そうすると学徒出陣組でしたか。

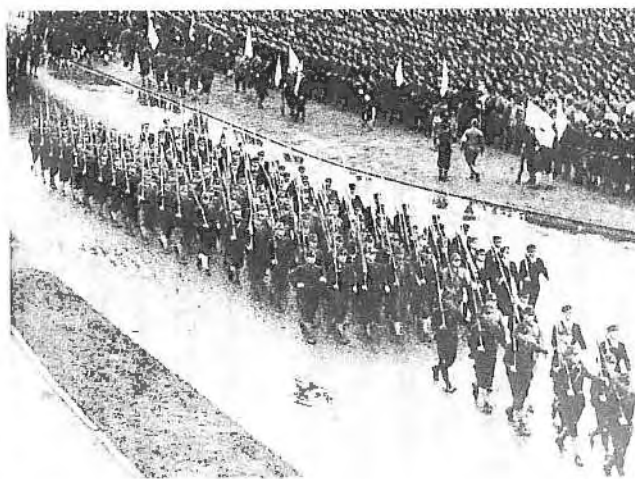
田中 そうです、先程もちょっとふれましたけれども、18年10月12日の閣議で「教育に関する戦時非常措置方策」が決定されました、医科系および理工科系のほかは徴兵猶予は停止されまして、12月に入営することが決まったわけです。

学生B よくテレビ等で拝見しますが、神宮外苑競技場で行進された組にはいられるのでしょうか。

田中 ええ丁度東京におりましたので、雨のなか今の国立競技場当時の神宮外苑競技場で壮行会をしていただきました、時の東条英機首相ほか沢山の方面の激励をいただきました。あのときは全国で5、6ヶ所そういう壮行会があったようです。

学生B その時、学徒出陣された方々はどれ位の人数でしたか。

田中 9万6千人と聞いております。私共の神宮では2万5千人程参加しました、スタンドには女子学生を含む



在校生が一杯ですから3万4万人位の数がいらっしやうと思えます、大変な見送りをしていただきました。その結果陸軍に8万、海軍には1万6千人位が学徒出陣組として入営されたと思います。

学生B そうしますと、徴兵猶予の停止が決まってから入隊されるまでの期間は50日位であったと思いますが、そのときの心情をお聞かせいただけますでしょうか。

田中 当時の学生の大部分は、有史以来の国難に身を投じなければならぬという義務感から、止むを得ないというふうな受け取る者が大多数でした、

ですけどその裏にはできれば学生生活をもう少し続けたいという願望もあったことは否定できないと思います。

当時は今日と違いました、高等教育を受けている数は大変すくなくて、同世代の若者の3%位でしたので世間からは割合高く評価されていきました、徴兵猶予が決まってから入隊までの50日は極めて貴重な時間でしたので、身辺の整理をしたり娯楽に在る限られた時間を惜しんだものです。

学生B その当時、相当に悩んだ方がいらしたんではないですか。

田中 私どもも見聞きしておりますけれど、あとでいろいろ話しあってみますと、この間生死について真剣に悩んだ者も少なくなかったようでした、3日3晩死にもの狂いで悩んだという話も聞いたことがあります、丁度戦局が相当逼迫しておりましたのでそうした悩みがあったのではないかと思います。

学生B 12月1日歩兵部隊に入隊され、初年兵教育を受けられたわけですが、苦しいことかあらわれましたでしょうか。

田中 私共は12月1日に東部6部隊に約千人入営しました、その日に東条首相が見えて営庭に整列した我々を長時間にわたり激励してくれました。

大変、快適な気持ちで入隊したので

私は18年10月非常に準備の整った教育で、地上に於いて空中でやる操作をすべて徹底的に覚えて、1週間目位から飛行機に乗りはじめ20日目位には単独飛行を致しました。

18年12月には一人で特殊飛行、今でいうアクロバットを全て習得し、その後編隊飛行、航法等の訓練の後熊谷では3月19日に終業式がおこなわれました。

そして、それぞれ戦闘隊、偵察隊、爆撃隊と分科がわかれて専門の教育戦隊に行つたわけです、6月の半ばに私は宇都宮飛行学校の教官になりました、戦隊にいった同期生は隼とか鐘馗、飛燕の様な実戦機の訓練に入ったわけです、そして11月にはフィリップ、レイテ湾に出撃しております、その後の沖繩戦では少年飛行兵と特操が特攻隊の主力になって散華したのです。

学生C 2期の田中さんの場合は如何だったのでしょうか。

田中 私共の場合は先程申し上げましたように幹候試験を終わってから特操志願をして2月11日に、私の場合は宇都宮陸軍飛行学校の金丸教育隊に入りました。

2期千2百名と申しあげましたが、そのうち8百名は熊谷飛行学校、私共4百名は宇都宮飛行学校でしていくつ

かの教育隊に分かれました。

2期の場合は初年兵を3ヶ月、飛行学校では基本学校における学科教育に加えて、先ず1ヶ月余はグライダー教育を実施し4月になりましたから、赤トンボといひます中練を使つての基本教育です、これを4ヶ月実施しまして7月下旬基本学校を卒業し始どが外地で実戦訓練を受けたわけです。

私の場合は金丸教育隊から僅かに5名だけ軽爆の基地である八日市の第4教育飛行隊で双発機の教育を受けました、その年の11月ですから飛行機に乗り出して8ヶ月目ですが特攻志願がございまして、全員志願しましたが約半数は銚田に行き各特攻隊編成の中に組み入れられました。

2期のなかでも菊池で教育を受けた戦闘隊の半数は沖繩特攻で散華しましたし、旧満州で訓練を受けた百名を越える同期生が酷寒のシベリヤで4年にわたる抑留生活を余儀なくされました。

学生C 航空関係の本などを見ると、一人前の操縦者になるためには3、4年かけて教育をし、実戦に参加するためには4百時間位の操縦時間が必要だといふことを読んだ記憶があるんですけれども、皆さんの場合はどうだったのでしょうか。

腰塚 3年から4年かけて操縦者になつ

たというのは、少年飛行兵の人達は軍隊の基本から教えなければいけないわけですね、年少ですから身体を作つてそれから飛行機の訓練を始めるそれで

間に合いませんので「特別」がついている様に大学、高専を出た人達は常識をわきまえて、身体も出来ているので

すぐ飛行機の訓練をして戦争に間に合うだろうといふことで特別操縦見習士官と言ふふうになつたんですね、ですから1年余りで、特攻隊で出撃したわけです。

飛行時間もその人によっておききな差があります、戦闘機の訓練は一人でやりますから1日に1回約30分ですが爆撃機は全員のつて上空で交代いたしますので、1日4時間位の飛行時間になります、私の場合教育をして

おりましたから練習機は同乗して訓練致しましたので飛行時間は多い方です。

田中 2期の場合も目標とすれば10ヶ月位で養成しようといふことであつたと思います。早い者は1年を過ぎる位で実戦に出ております、操縦時間は百時間から多い人で2百時間位でした。

腰塚 1期生、2期生は操縦訓練は終了しておりました、3期生、4期生は学生航空連盟出身の一部を除いてガソリンの欠乏等により訓練が出来なくなり整備や飛行場大隊に変わった人もい

るようです。

学生C アメリカの方でも学生が航空決戦に参戦したという記事を読んだことがあるんですけれど、それはどんな様子でしたか。

田中 徴兵猶予の事を調べて見ますとアメリカもイギリスもフランスも徴兵猶予というのはなかつたんですね、みんな志願して進んで空中勤務になつた、ただドイツの場合は学生を4万6千人動員しております。

特攻隊になつた人

学生A 特操出身者で特攻戦死者が大勢いると伺っておりますが、そのことについて見聞なかつたことをお聞かせ下さい。

田中 特攻で亡くなつた方は1期の場合には戦没者が700名のうち特攻で沖繩特攻とフィリップを加えて222名、2期の場合には139名戦没しております、沖繩特攻が76名です。

海軍の場合も大変多く13期予備学生が千六百7名が亡くなっておりまして、そのうち47名が特攻で戦死しております、14期は丁度特操2期と同じなんです、410名戦没され159名が特攻散華されております。

腰塚 同期生の倉本利雄大尉は60振武

隊で都城から5月11日に出撃散華されたのですが、奥様のお腹にお子さんがいて、一目会いたい一度この手で抱きしめたいという思いを次の遺書にのこして亡くなりました。

愛児よ

若し御許が男子であったなら

お父さまに負けない

立派な日本人になれ

若し御許が女子であったなら

気だてのやさしい女性に

なって呉れ

そしてお母様を大切に

充分孝養をつくしてお呉れ

父より

愛児へ

沖繩への2時間半か3時間どの様な気持ちで飛んでいたかと思うと、今でも涙が出る様なおもいです。

4年前、京都の護国神社の頌徳祭に奥さんが見えまして、「腰塚さん、お蔭様で50年母、子、孫、健やかに生き



倉本利雄少尉

てきました、長いようで短い年月でした。」と申しておられました、その言葉のなかにはいろいろな思いが込められていた事と感激いたしました。

当時の事です、死が定まっていたので、苦勞をかけては申し訳ないと思ひ、許婚者に幸せに暮らして呉れる様に話して、結婚しないで出撃した戦友もおりました。

また25振武隊で出撃した柴田信也君は入隊した時同じ区隊でした、戦後日比谷でばったり会ったのですが、酷い火傷ではじめは分からない位でした、かれは知覧から出撃して飛行機の具合が悪く帰ってきたのです、「特攻隊は帰ってくるものではない」と参謀から罵倒され2度目に出撃したがまた飛行機の具合が悪く沖繩まで行かれない、それでも知覧には帰れないと黒島に不時着しておお火傷をして失神していたのです、夢に母親が出てきて、「お母さん」といって目が覚め又意識がなくなる、そうした事を何回か繰り返しているうちに島の子供が見つけてくれた、助けられたけれども傷がひどく傷に蛆がわいたりしている、そこにあとから又不時着した人がきた、同期生の安倍少尉で責任感が大変強く何としてでももう一度出撃すると決意、村の青年に小さな伝馬船で手漕ぎで奇跡的に鹿兒

島に帰り、その戦友が再度出撃する時に黒島の上空から火傷の薬と沢山の包帯を落として沖繩で散華した、その薬のお蔭で俺は生きていますと柴田君は言っていて散華した戦友の墓参を死ぬまで続けていたという事もありました。

大学から一緒だった戦友ですが、小牧の飛行場で3式戦の戦隊におりましてB29を撃墜して「学鷲の殊勲」と大きく新聞に報道されました、B29は前方だけが死角で前方から編隊長機を撃墜編隊の間をぬって上空にでて、横滑りをして近くの雲に入って基地に降りましたが僚機の飛行兵は編隊をぬけて正しい操縦をしたために、2機とも犠牲になりました、その事については彼は話す事はあまりありませんでした。

田中 1期の場合にはそういうふうにな多数の方が沖繩特攻で亡くなられましたが、私共2期も76名が散華されましたが、知覧に行きますと館長さんが上原良司君の遺稿のことを話されます。

当時学生ですからいろいろな主義、主張を持った人がいたわけですね、上原君の場合はその遺書の中にこういうふう書いてます、「私は明確にいえば自由主義に憧れていました。日本が真に永久に続くためには自由主義が必要であると思ったからです。」

それは現在日本が全体主義的な気分



上原少尉

それは現在日本が全体主義的な気分を考えたとき自由主義こそ合理的な主義だと思えます、又指導者がいなくて残念だったというくだりのところもありまして「真に日本を愛する者として、日本は現在の如き状況にはあるいは追い込まれなかつたと思えます、世界どこにおいても肩で風を切って歩く日本人、これが私の夢みた理想でした。明日は自由主義者が一人この世から去って行きます、彼の後ろ姿は寂しいですが心中満足でいっばいです」こういった沖繩で散華したわけですね。

私の戦友で一緒にいた横山善次君の場合は、8月9日に日本はポツダム宣言を受諾して戦争は終戦間近で、しかも特攻はストップしていたんですけれど、情報の不徹底か13日に水戸の沖にアメリカの巡洋艦が来襲したときに、彼は特攻攻撃でその艦を大破しました。

戦後横山君のご遺族は大変熱心に横山君のいろいろな手記などをまとめて刊行本にして私も送って頂きました、彼の当時の考え方や、あとからそれを整理したご遺族の考え方も一緒にあっておりますが、この様に書かれております「当時日本人が必死になって大國アメリカに立ち向かったのは負けたら日本に未来がないと本気で信じていたからでしょう、誰がだましたものでもなく、日本国民共通の認識でした。」

戦わずしてハル ノートを受け入れていれば、今日の日本はあろうはずもありません、貧しさから抜け出せなかつたばかりか白人種と対等な立場を得ることもなかったでしょう。

残酷な様ですが、今の日本があるために、勝ち目がなくとも戦い同じだけの戦死者を出さなければならなかつたのです。」

こういうようなことを書いておられますけれども、私はむごい様ですけれども、あの時にこうした沢山の人が戦場で死なれたことそのことは大変悲しいことでありましたが、当時の私どもとしてはこうした手段による以外勝ち目がないと信じていたからだと思います。

当時の状況は、皆さんは想像できるかどうか解りませんが、軍人だけではなく銃後の国民も軍人と同じような気が

概をもって戦争に協力したということだと思います。

学生A 特攻でおなくなりになった方々の心情がおぼろげながら理解できるような気が致します、特攻の方が沢山いらしたと思いますが特攻というのは志願して決められたのでしょうか、またなぜそれを断ることができなかったのでしょうか。

田中 私の場合ですが、19年10月の終わり頃八日市飛行場で特攻希望の有無を問われたときの状況ですが希望する者は「熱望」と「希望」この二つだけです。

熱望する者は一歩前進して特攻の意思を表示しました、私共の仲間で希望しないという者はなかったですね、強制的といわれても仕方ないと思います、だいたい他の部隊も同じような状況のようであったようです、11月始めには選考があり半数が銚田に行きすく、希望を出した当時のことを回想しますと、まんじりともせず眠れない日を過ごし、どうせ死ぬなら潔く死のうといふことで皆な決意したところも話しておりました。

腰塚 この事は度々皆さんが話題にされます、又世間ではそういうことをいうのであって当時はそういう雰囲気ではなく、紙に書いて「熱望」「希望」

「希望しない」とか丸をつけるとかいう所もあった様です、私共の場合は、田中さんが言われた様に上官が訓示をして「今国はこういう状況なんだ、お前たちは飛行機乗りなんだ先頭にたつて国の為に尽くしてくれ、特攻隊という組織でやらなければならぬのだ、やってくれる者は前に出ろ」と言われた時に、皆な隣りを意識しながら一歩前に出たわけです、其れが現実であつたので考えるとそれが特操の役目だったのではないですか。

当時私自身が特攻隊長の命令を受けた事は、必ず死ぬということでした。特攻隊になり必ず死ぬ何故死ななければいけないのか、自問すると心の何処かに生きていければという気持ちがある訳です、しかし死ななければならぬ、天皇陛下のために天皇陛下の為に、なんだ国のためとはなんだ、自分を育ててくれた親兄弟が住んでいる国を守る為に自分自身が人柱になるのだと、自分を納得するとうか納得させる。

しかし考えてみるとただ自分のことだけではない、昨日まで知らなかつた人が自分の部下となつてくるわけです、その人も一緒に連れて死ぬわけです、その部下の人にも親があり兄弟がありその人達にどの様に納得させればいいのかと、その様な或いはもっと深刻な苦しみをのりこえて何千人かの方々が特攻隊で散華したのではないでしようか。

人間としての極限を経験したとか、修羅場をくぐつたと言ふ言葉がありますがこの様な体験を当時の若者はしてきたわけですよ。

学生A よく分かりました、学徒出身の沖繩での特攻の方は陸海軍とも多数いらしたようですが、現役の士官との比率など教えて下さい。

田中 海軍の方から申し上げますと、海軍は士官総数の特攻戦死は70名、そのうち飛行予備学生それから生徒これが60名ですから海兵出身者が15%、学徒出身者が85%という数です。

また陸軍の場合は46名、この内陸士出身者及び少尉候補生出身者の現役士官は87名、特操が203名幹候が66名併せて予備役士官が209名ということ約75%、ですから学徒出身者の特攻の割合が多かつたわけですが、沖繩戦までに優秀な陸士、海兵出身者が戦力からなくなつたということですよ。比島では特操1期生41名、幹候19名も特攻で散華しておられます。

少年飛行兵出身や予科練出身者も多数特攻で戦死されており、陸軍の場合沖繩で少年飛行兵が22名下士官が73名乗員養成所出身が94名で併せて479名の



知覧特攻観音

方が特攻戦死されております。

学生A お話ではこんな沢山のかたがたが特攻戦死されておりますが特攻戦死者を祭祀してあるのは靖国神社だけです。

腰塚 靖国神社と知覧の平和観音、世田谷山観音寺の特攻平和観音、私共特操に限って言えば京都護国神社に陸軍特別操縦見習士官の碑を建立して戦没者をお祀りしてあります。戦没者は903名そのうち1期生は70名2期生が139名3期生は33名で4期生が22名です。特操会としては、隔年に頌徳祭を催しております、題字は当時の佐藤栄作総理大臣で碑文は旧NHKの解説委員長で同期生の家城啓一郎君で設計も同期生で建築家の吉原正君で、昭和46年



特操之碑

に建立致しました。

そのほか海軍では鹿屋に又陸軍では知覧にも万世にもあります、各地に慰霊碑があります、フィリッピン、ルソン島やセブ島等海外にもございます、特攻慰霊財団にも詳しい資料があるとあります。

田中 世田谷の特攻平和観音は私共の所属しております財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会が主催し毎年秋の彼岸の9月23日に慰霊祭を実施しております。



世田谷特攻観音

現代青年の意識

田中 今度は私どもの方から学生諸君に逆に質問したいと思えます、先ず第一の質問ですが、少し古いのですが平成3年にアメリカのミシガン大学が学術研究のために各国の研究機関に呼びかけまして、各国で千人前後の面接アンケートを実施しました、日本では無作為に選んだ一六二〇人中一〇一一名の回答がありました。

その中で「一朝有事の場合には国のために戦う」と答えた人は10%10人に一人でね、「戦わない」といった人が

41%「分からない」と答えた人が49%という数字を見たことがあります。

他の国の「戦う」という数字を見てみますと、韓国が85%、アメリカが70%、日本を除いて一番少ないところがスペインで47%の人が「戦う」という意思表示をしています、この数字を見て思うんですけど、戦後50年以上平和と繁栄が続いてきたのでその中で自由主義や平等主義をはき違えて自己中心的な生きかたが蔓延していると思うんですよ、皆さんに言ってるわけではないですけど、次代を担うべき若者の中には平和の美名のもとに無気力化して、国土愛とか、家族愛の美德も地に落ちてしまつて最近の状況をもてわかりませんが、まさに世紀末的な現象が随所に露呈されているわけですね。

私どもとしてもこの数字はそんなにかけ離れている数字ではないというふうに思うんですけどどうでしょうか。

学生A 率直に「戦う」という人が10%ということ、田中さんのお話でありましたように、戦後50年間外国では戦争はあっても日本において戦争がないということから、そもそも戦争というものを実感として感じられないというのも大きいというか、現に「分からない」という人が半数近くいるのは戦争といつてもピンとこないというのが

一つ有るんじゃないかなというのがある。りまして、そうはいっても「戦う」という人が10人に一人しかいないというのは自分としても非常に憂慮すべきことだと思います。ただ「戦わない」といっている人も、現実には敵が例えば北朝鮮でも来た時に「本当に戦わないか」といわれて、それでも「戦わない」と果していかどうかというのは、それも戦争というのが分からないところからきているところもあるし、そのへんが韓国が85というのは常に北朝鮮がいますしですから……

腰塚 学生だけではなくて、日本は歴史にない50年以上の平和が続いているわけですよ、ですから学生だけではなくて、世の中の指導者であるべき人達まで不祥事が多いというのは平和ボケだと思ふのです。ただ私達の時代は満州事変から支那事変までそういう時代を過ごしてきたけれど、私たちも学生時代は君達に劣らない位遊んで歩いたほうでした。ただ戦争になって、やらなければという時はよしやるんだという気になったものです。だから今の若者はと言っても「大丈夫だよ、若い者を信じろよ」と私は若い人達を信じているつもりです。

「戦わない」といっておられますが、自分が現実に直面してみたら、そこでどうなるかは……

田中 次に靖国神社のことで一寸お伺いしたいのですが、一つは首相参拝の問題、ご説明するまでもなく私どもの年代の者は誰しもが戦死したら靖国神社に祀られて国民の尊崇を受けて、祭事は国で手厚く行われるものと信じていたわけですね、祭事は神道に則り神事当局により行われ、勅使もご差遣になつていて、こういう状況のなかでしかし政府は全く知らん顔をしている。

神道 というのは、特定宗教に関わることは憲法違反だという説もあるけれど、国の為に命を捨てた人を祀ることは、憲法よりもっと高次元の問題である、国で祭祀を行えば非難する外国がある、先程言った中国ですね友好を害するというような考え方を保持する人がいるんですけれど、この事について皆さんはどういうふうにご考えられますか。

これは首相だけでなく、国の高官とか、国を代表するような方が参拝することに於いて中国が大変非難している現実があるわけですから、それで皆さんはやめているわけですが、

学生A 靖国のことと先程の「戦う」「戦わない」ということと関係してく

ると思うんですけど首相に限らず、国家をリードする人間が国のために亡くなった方々に対して頭を下げないということが国の為に尽くすということの意味を分からなくさせていると思えます。だから首相をはじめとする人達がお国の為に尽くした方々に対して頭を下げることはごく自然なことだと、靖国神社に参拝する形で示すべきだと思います。首相が中国をはじめとする外国にクレームをつけられるという理由だけで参拝しないのはおかしいのではないかと、そのように思います。

田中 過日遊就館前の特攻勇士の像の創立一周年で靖国神社に参拝した際、この6月に東京都知事の石原慎太郎さんが靖国神社に参拝をするということを通じてこられたということですが、どう思われますか。

学生A 確かに首相が参拝しないというのは残念なことでありまして、それでも都知事という地方自治体の長である方が政治の指導者が参拝するという事の意味は大きいと思います。とくに東京都は日本の首都ですし、その意味では他の県と違って東京都の知事が参拝するという事の意味はそれは非常に意義あるものだと思っております。

田中 有難うございました。

もう一つは新聞報道のことですが、靖国神社では春秋の大祭があつて勅使がご差遣になっておりますし、また御霊祭という御霊神をお慰めする祭典があるのですが、このことについて日刊紙は一行も報道しようとしません。そういうことでは地方在住の国民が靖国神社からだんだん離れていくのではないかと、私どもは心配しているんですが、そういう新聞の姿勢についてどのように思われますか。

学生A 新聞が社会全体、国家全体に対して与える影響を考えますと、靖国神社での出来事というのはその周辺にいる人は新聞がなかったとしても分かりませんが、地方の人にとっては報道しないとなると靖国というのは何なのか、分かりませんし新聞が靖国神社の行事を伝えることが国家のために尽くされた方々のことについて常に心を寄せていくきっかけとなると思ふので、靖国で行われていることも正確に伝えるべきだと思ふので新聞がそれを報道しないというのはおかしいのではないかと思ふます。

腰塚 先程控室で雑談に出たのですが、皆さん方は6月に靖国神社にお参りになると聞きましたが、学生の方がお出でになるのですか。

学生B もともと主催されているのは

沖繩顕彰会の方々です。腰塚 それには毎年学生の方はどれくらい参加されるのですか。

司会 田中 これは金城さんがはじめたんですよ、国士館大学の教授でそのお父さんの時からはじめたのです。

主催するのは学生です、祭文を読むのからみんな、参列するのは年寄りの方が多く、教育関係者が多いようです。腰塚 学生さんは何十人かは参加されるわけですね。

司会 田中 来てますよ百人ぐらい、参列者は大体……

学校関係の人が多くですよ、沖繩のひめゆりだとか、鉄血勤皇隊とか「対馬丸」で学童疎開で死んだ人、これら御霊神を6月23日にお祀りしています。田中 私どもも調査してみますと、今の小中学校の教科書に靖国神社のことは全然記述されていません、亦A級戦犯も別に分祀するべきだといっています、これも昭和28年の国会で全員一致で「昭和殉難者を犯罪人とみなさない」という決議をしているのですから、この辺をもう少しはっきり整理をして独立国らしく処理して頂ければとおもいます、皆さんも若い力で頑張ってくださいたいと存じます。

学生C 国立競技場のマラソンゲートのところに「出陣学徒壮行の地」の碑



が建立されておりますが、ご関係があったのですか。

田中 これは平成5年10月21日神宮外苑競技場で壮行式に参列した学徒兵の所属した前橋、豊橋、仙台、久留米、の予備士官学校と私ども特操の2期、3期、海軍の飛行予備学生14期、第1期海軍飛行予備生徒以上の世話人が文部省と交渉しながら費用を拠出して碑を建立し毎年10月に集いを開催し亡き学友を偲び平和を祈念しております。

場所が千駄ヶ谷門のマラソンゲートの側にありますので、訪れる人も多く由来をお読みになって大変関心を示す人が増えてきております、率直に申し上げますと次代を担う内外の若い世代にこの歴史的な事実を伝え永遠の平和を祈念しようという趣旨で建てておりますので、皆さん方のなかでまだ見ておられない方がいらっしゃったら、或いはお友達を紹介して頂いてその雰囲気味わっていただきたいと思いま

す。

腰塚 当時の私たちがどういう気持ちで特操を志願して戦ったか、その後どう言う考え方で生きてきたかという事を貴方達に伝えるよい文章があります。前に特操1期生会の会長をしていた家城 啓一郎君が京都の護国神社に建立してあります陸軍特別操縦見習士官の碑の碑文「嗚呼 特操」のなかに

「我々は何をやってきたのか、彼らは何のために戦い、死んだのか、なにを守ろうとしたのか、死の直前にあったのは任務完遂であるにしても、その脳裏をかすめたのは、懷疑か諦めか只管の献身か……戦後の手記は彼らの死を美化し哀惜し一方で無駄な死、汚辱の歴史と評価した、一人の人間が生きて死んだ、死んで生きたのかも知れない、また死なずに生残った……小さな存在がいまや忘却の彼方に沈もうとしているがその生は刻まれねばならぬと思う、戦中派世代のあと継ぎのために、なにをやってきたのか。」

長時間になりまして規定の時間を過ぎた様です。

企画者 田中 皆さんには長時間有難うございました、後藤さんの速記録を整理して年内に「特攻会報」に掲載する予定にしております。

本日のご苦勞様でした。

〔学徒出陣五十周年の碑文〕

由来

昭和十八年（一九四三）十月二日、勅令により在学徴集延期特令が公布され、全国の大学、高等学校、専門学校で文科系学生・生徒の徴兵猶予が停止された。この非常措置により同年十二月、約十万人の学徒がペンを捨てて剣を執り、戦場へ赴くことになった。世にいう「学徒出陣」である。

全国各地で行われた出陣行事と並んで、この年十月二十一日、ここ元・明治神宮外苑競技場においては、文部省主催の下に東京周辺七十七校から参加して「出陣学徒壮行会」が挙行された。折からの秋雨を分けて分列行進する出陣学徒、スタンドを埋めつくした後輩、女子学生。征く者と送る者が一体となって、しばしあたりは感激に包まれ、ラジオ、新聞、ニュース映画はこぞその実況を報道した。翌十九年にはさらに徴兵適齢の引下げにより、残った文科系男子および女子学生も、軍隊あるいは戦時生産に動員され、学園から人影が消えた。

時流れて半世紀。今、学徒出陣五十周年を迎えるに当り、学業半ばにして陸に海に空に、征って還らなかつた友の胸中を思い、生き残った我ら一同ここに「出陣学徒壮行の地」由来を記して、次代を担う内外の若き世代にこの歴史的な事実を伝え、永遠の平和を祈念するものである。

平成五年（一九九三）十月二十一日

学徒出陣五十周年を記念して

出陣学徒有志

特攻隊員の手紙②

「白雲に乗りて君還りませ」

(第二国分基地の記)より

大塚 晟夫

中央大学専門部

第三章 難隊名古屋空海軍少尉候補

生 23歳

昭和20年4月28日 沖縄沖敵艦船に

特攻出撃戦死、九九艦爆搭乗

兄より妹へ 昭和20年3月〜4月

知子、君から非常に心暖まる慰問帳を貰ったのは昨年、即ち昭和十九年の四月二十九日のことだった。三重空での面会は私は終生忘れることが出来な

いだろうと思う。
あの日は前の晩にいろいろ考えてはどうしても眠れなかった。私のはじめの短剣姿を見ることが出来るのだと思うと、ついわくわくして子供のよ

うな気持ちになった。
その日の正午、広場に整理してから私は、隊門から入って来る面会人をどんなに探したことだろう。分隊士の手違いから四分隊は少し遅れたが、その時の私の気が気でなかった心の底は、

君などにはとても判るまいと思う。

私は、やっとのことで母上と姉さんに面会した。そして連れだって海岸へ行った。後で分隊長に手荒く叱られたけれど、そこで美味しいおはぎを食べながら、いろいろの話をした。楽しかったね。短かったね。二人に別れるとき、別離の情を如何ともすることが出来ず、全く困惑した。

君の慰問帳を手にとったのは、面会が終って生徒館に帰ってからのことである。隊門の番兵から貰ったのである。どんなに感謝に満ちながらあれを読んだか、君に判って貰いたい。

私は三重の四か月の生活のうち、病室で厄介になったり、また休養、軽業で他の人とはどうしても疎遠となり、謂わば孤独だったのだ。それに三重空での生活は海兵団とは比較にならないにしても、相当暗い、お互いに団結していない生活だった。しかのみならず、病気をした私が独りぼっちになったのは、どうしても必然のことであつたらう。だから、私は君のものを何遍と知れず見、かつ読んだ。君が離れている兄に宛てた誠心を、私はそれに匹敵する誠心で応えたつもりだ。

君から第二の慰問帳を貰ったのは鈴鹿だった。それも三月に入ってから、しかも君の誕生日に私は書留を受けとつ

た。それが第二の慰問帳だった。東京は連日にわたり大空襲を受けている時だった。昨年の四月とは事情が違う。

その連日の熾烈なる空襲の下にあって、君は私に心優しい冊子を送ってくれた。私は君の高価な贈り物を受ける資格があつたらうか。

燃料不足のため、私はずっと飛行機に乗れず毎日松根掘りをやっていたのである。葉書にはいつも訓練に頑張っていますと書いたので、君はさぞかし

と思つていたことであろうが、そのことを考えると慚愧に堪えない。本来ならば、私から君に何か贈つて君の空襲下の慰安に供するのが当然なのに、却つて私が贈られたのはどうも逆のようである。

私の鈴鹿での生活は、昨年五月二十六日、入隊してから今年三月十六日退隊するまで、十ヶ月の永きにわたつた。この十ヶ月間、私は分隊の中で愉快的に動き回つた方である。生活は比較的明朗であつたし、何といつても君に知ってもらいたい事は、十ヶ月間一日も病気をしなかつたことである。

三月十六日、私はここ名古屋航空隊に入隊した。当隊では幸い時間の余裕があるので君にたいする返礼として、何時命令が出るか知らないが、その出撃の日まで、私に残された自由時間を

利用してこの手紙を書いてみようと思つた。

ともあれ、今日これを書き出した。その日は昭和二十年三月二十二日、即ち私の誕生日の前日、ところは愛知県西加茂郡挙母の山上にある名古屋海軍航空隊。冬より層雲がたれこめて、暖かい細糸のような春雨の降っている日である。

冬の日、白いシャツ一つでも寒風もものは、陽光燦めく海面を数艘のカッターが競つて滑つて行く姿は想像するに美しい。もし仮りに君が函館でその光景を見るとしよう。君は讚美し喝采を惜しまぬだろう。しかし競漕する当人にとっては、正に地獄である。必死なのだ――。

また函館の浜を君が散歩するとしよ。その浜は明治の昔、啄木が身によれよれの着物を纏い、病める躰を曳きずつてとぼとぼと漂泊したその浜だ。君はその姿を想像する。その想像には涙があつても、それはうっとりした甘い涙にすぎないだろう。けれども啄木はその時、血の涙を流して彼の歌を詠つたに違いない――。

君はいま函館にいる。君からはまだ何の便りもない。君が東京から遙か北の国、北海道へ移つたとき、私も雪被る鈴鹿の山なみを後にして名古屋へ来

た。
函館なる君を偲んでは、北海道へ転動したいとつくづく思う。

私は急がねばならない。何故というに、私の最初の、そして最後の出撃が間近に迫ったからである。敵艦に命中する訓練が忙しいので、これもあまり長く書くことは出来ない。

今日は四月十一日である。第十航空艦隊から出撃準備の命令はすでに下りた。いつ頃俺は出られるだろう。今の私にとっては、死そのものより、いかに効果的に敵艦に命中するかが問題である。

去る四月五日、名古屋空の艦爆二十機は、午前十時堂々の出撃をした。われわれの教官たちは大方それに参加した。皆日の丸の鉢巻を締め、ニッコリ笑いながら手を振って出て行った。私は無上の感激をもって彼らを見送った。

彼らは翌六日午前、九州国分基地から沖繩へ向って出撃——そして帰らなかった。

私は君の心のこもったいろいろな慰問帳にたいして、何か書かねばすまないと思つて書き出したのである。

君と守江さんと写した写真は、手荒くよく撮れているね。実に別ピンさんだね。いま君に逢うと、俺はちょっとテレるかも知れんよ。一緒に道を歩く

のも、ちょっと気が引けるな。全く美人になつたらうね。心配だ。

姉上と凜ちゃん、三月三十一日来てくれた。当時、隊は非常に切迫していたので、面会は全然許可されなかったが、分隊長に強引に頼んでほんの少しの時間面会を許可された。嬉しかった。二人が少しも変わらないので安心もした。正直をいうと、もっと会いたかったね。君とも会いたい。父上とも一杯やりたい。

母上にも無理を言つてみたい。しかし、いま皆に会うのはどうかと思つている。私の先が知れているからね。一年も会わないでいたのが、面会してすぐ死んじゃつたら面白くないものね。

私は永遠に皆の胸にある。君の心の一番深いところに常に私はいる。歎くに及ばない。

四月二十一日

姉さん、凜子、知子

俺はまだ生きている。不思議なものだ。

九州の南、国分の第二基地で俺はいま、またこの日記を書きはじめる。

四月十三日午前八時半、俺たちは名古屋空総見送りの人垣の中を、白のマフラー、日の丸鉢巻を飛行帽の上

にキリリと締め、意気揚々と出発したのである。

出発前、草薙隊員一同は、司令から別離の盃をうけ、握手を交わし、一緒に記念撮影におさまった。

午前九時、俺たち二十機は、みんなの帽振る中を堂々の編隊を組んで離陸した。飛行場上空を通過、一度名古屋へ出て、さらにそれから鈴鹿山脈を越え、奈良を経て大阪へ出た。

名古屋の町、大阪の街は焼野原だった。大阪は特にひどく街の北半分何もなかった。申し訳ないと思つたね。軍人の罪、死してなお償えないと思つた。大阪から変針して瀬戸内海へ入った。高度二五〇〇、速力一五〇節、快調な

そして風光麗しい瀬戸内を一望の下に眺めながら、四国を抜け九州に入った。宇佐飛行場上空を過ぎ、中津で変針して熊本へ向つた。高度二五〇〇をと

り九州の山岳地帯をよぎった。この辺から雲が低く出たばかりか、気流も頗る悪く相当にガブった。熊本から八代

に出て天草を右に見て南下し、噴煙たなびく桜島へ——飛行時間三時間余で無事国分基地へ着陸した。

まあこんな具合ではるばる九州へ来たわけさ。

この一週間俺は戦争をまざまざと実感した。昨日まで士官食堂のあの卓で喰つていたのが、その日の昼と夜の食事時に

は、料理はあつても食べる主がいらない。鈴鹿でも名古屋でも、訓練で死んだ者はいる。しかしせいぜい何か月に一人か二人である。

しかし、ここでは毎日多くの人間が確実に消えてゆく。昨日もあの帽振れの見送りを受けながら出て行った歴戦の勇士が、沢山帰って来なかった。

——明日はわが身——、俺もその「死」を購うために、行列作つて順番待っているようなものだな——。

いまちようど午後三時だ。俺の周辺には十数人がゴロゴロ寝ている。これがみんな「生き神様」と新聞で云われている連中だ。俺もその一人だそうだ。新聞なんて馬鹿なことを言つもんだ。人間が生命懸けて、いや全く必死の出撃しようというのに、軽薄で白々しい記事を書くのが報道班員と称するなら、そんな連中こそ慙死すべきだ。

昔は俺も新聞紙上で勇壮な記事を見て単純に感激したが、いま静思するに

あれは驚くべき錯誤だね。スタンド・ブレイに毒されず、むしろ黙々と自己の本領を発揮して新聞記事に採りあげられない人間がいかに多く、そしてそのような人達の中にこそ、真の偉人がいるということを知っている。

俺は新聞なんか軽々に載せられて茶化されるのは嫌だね。

はつきり云うが俺は好きで死ぬんじやない。何も心に残すところなく死ぬんじやない。国の前途が心配でたまらない。いやそれよりも父上、母上、そして君の前途が心配だ。心配で心配でたまらない。俺の死を知って、皆が心定まらず悲しんでくだらない道を踏んで行ったならば、俺は一体どうなるんだろう。

皆が俺の心を察して、今までどおり明朗に仲良く生活してくれたならば、俺はどんなに嬉しいだろう。君達は三人とも女だ。これから先の難行苦行が思いやられる。しかし明朗な君達は、必ず各自の正しい道を歩んで行くだろう。

俺は君達の胸の中で生きている。会いたくばわが名を呼び給え。

四月二十二日

今日も快晴である。雲量は零である。春の陽射しが滅法強い。しかし風が強いので凌ぎ易い。ここは山上にあるし、俺のいる宿舎は林の中にあるので朝夕は涼しい。朝起きて林の中を散歩するのは、そこはかとかなく良い気持ちである。

「山林に自由存す」とは、わが畏敬する詩人国木田独歩の詩である。山林の靈気を大いに満喫して、俺は一日の

英気を蓄える。

昔、橋本左内は刑場の露と消えたが、その前日まで学問にいそしんだという。全く偉いね。俺みたいな愚物にはとても出来ない業だ。人間というものは、そう簡単に立派になれるものではない。

四月二十三日

午後二時半から離着陸の飛行訓練がはじまった。俺も一回乗った。鹿児島湾が滅法美しい。桜島が噴火口から煙を吐いている。桜島を北からみると、全く美しいよい恰好だ。俺の乗ったのは夕方だったので、桜島や霧島が濃い紫に映えていた。下の景色は箱庭のようである。

俺は昔から見下ろすことが好きだったが、飛行機の上から見た景色はまた格別だ。あそこに発電所がある。あれを目あてに特攻をするつもりで考えると全く嬉しくなる。

夕方六時近くに飛行作業は終り、宿舎に帰った。今日は特攻の要領について課題が出た。

今月中には出撃出来るとは思うが、こればかりは命令次第なので判らない。すっかり生きのびてしまった。

四月十三日、名古屋を発つてからすでに十一日になるが、その間、生きたり死んだり、生れて初めての可笑しな

日を送った。十一日が約一年以上の価値があるね。死を知っての生き延びは、このように貴重なものだとは思わなかった。

俺は出撃のその瞬間まで、時間の余裕あらばこれを書き続けるつもりだ。俺は戦死するなんてちょっと信じられない。なんだか夢の中の夢のような気がする。当のこの俺ですら信じられない。だから、まして君達にとってはなおさらであろう。それほど生死は儚いものだとも云えるね。

もう夜も大分更けた。この部屋には十人寝ているが、もう大分寝てしまった。この人達もやはり各人各様の思想をもっているのだが、いま皆一様に特攻隊員である。

父上、母上、おやすみなさい。知子、明朗なる知ちゃん、おやすみなさい。

夜の十一時です。

四月二十四日

いま午前八時、指揮所の中でこれを書いているが、指揮所の中には誰もいない。隊長以下みな外で春陽を浴びてのどかな顔をさらしている。

あるものは石投げをやり、あるいは棒高飛をやっている。猫がねずみをとるのを忘れ、借金取りが借金をとるの

を忘れるというのはこういう季節を云うのであろうか。

飛行場の端では、地元の男女が地均しに励んでいる。中に紅一点、若い女の子が立ち働いているのがどうも気になってならない。ああ、春だねえ。馬が石車を運んでいる。のどかに見える。あの馬には戦争もへちまもあるまい。そういう姿をみると、俺もつい戦争のことを忘れて暫時春に酔う。春の功德たるや正に大したものである。今日は夕食時、隊長から二十八日総攻撃があると伝えられた。

さて今度こそは俺達も入るだろう。早いとこよい死場所を得ないとちょっと困る。こんどこそは必ず、草薙三次攻撃隊も参加出来ると思う。二十機がどういう要領で出るか知らないが、俺は必ずイの一番に突っ込む。今度の沖繩作戦では、日本は手荒く飛行機を使っているからな。負けられない。

これをまたあの土堤で書いている。十二夜の月は高く明るい。虫が啼いている。春の虫は悲しそうでない。嬉しそうである。楽しそうである。黄昏は暗く、鉛筆の先が霞む。月の光がこれを助けている。

月に啼く虫の音しげし春の宵もう見えない。しからは宿舎へ帰らむ。

四月二十五日

今朝は珍しく早朝五時半に起きて、上半身裸となって体操をした。誠に気持ちがいい。林の中で早朝の霊気を腹一杯吸いながら手足の関節を伸ばす。

俺は、断っておくが、墓なんか要らないからな。あんな固苦しいものの中に入ってしまったなら、窮屈でやり切れまい。俺みたいなバカボンに墓は要らない。父上や母上にそのことを宜敷く云ってくれ。

人間の幸福なんてものは、その人の考え一つで捉えることが出来るものだ。俺が消えたからとて何も悲しむことはない。俺がもし生きて家の者誰かが死んでも、俺は却って家のために尽くそうと努力するだろう。

ただ自分のことを始末出来ないで死ぬのが何より残念である。が、それを取って君達にお願いする次第である。これを書いてあるうちに、二十八日の出撃が確定したと云って来た。それで午後は日当山温泉へ出撃らしい。生きたり死んだり、この半月の間誠に忙しい。今度は本当に死ねそうだ。

四月二十六日

いよいよ攻撃は二十八日となった。爆弾は五〇〇キロ一発となり、機に装備された。爆弾を撫でて必中を祈った。

さて昨日は県下の女子青年団が慰問

に来て田舎の踊りをやった。巧くはなかったが、なかなか素材であった。昼食後、日当山へまた外出した。最後の外出であった。

午後十時、隊へ帰って来ると、名古屋へ行った隊長がその日飛行機で帰って来て手紙をもって来てくれた。四月十一日は函館の知子からのと、四月十八日は姉さんよりのと、それから鬼頭からの葉書であった。

四月二十七日

昨日最後の訓練飛行があった。機を整備して帰って来たら、夜八時だった。疲れたのですぐ寝た。

いま朝の八時だが、九時から明日の攻撃要領の説明及び打ち合わせがある。戸外では蟬が啼いている。ミンミン蟬である。この日記帳、戦友柿崎に頼んで送る。

君達は一生懸命勉強しなければならぬ。これからの日本にはさらにさらに大いなる試験があるだろう。俺は天命によっていまの日本を救うべく、また両親及び君達を救うべく死ぬ。

彼の世とやらでも君達を必ず加護するから安心してほしい。今日は滅法天気がいい。明日も必ず天気だ。快適な飛行日和だ。

いまた飛行場へ来て愛機の下でのノートをひろげた。午後一時半である。

午前中、隊長から作戦要領が話された。沖繩の嘉手納沖には、戦艦五ほか数十隻ある由、それを皆沈めに行くのである。

(編者注 以下会報43号別冊の「遺書遺詠に偲ぶ特攻隊員の心情と重複するが重ねて入れる」)

愛機は悠然として爆弾を積んでいる。これが皆、木っ端微塵となるんだからな。人間の棺桶として、百万円はちょっと豪勢である。

出撃は午後三時と定まった。夕方敵地へ着く。いま午後十時、午後飛行機を整備して、夕食後、別離の盃を挙げた。

明日にそなえて早く寝る。ここへ来てから十二時前に寝たことなし。今日は早く寝る。おやすみなさい。

春の月が美しい。明日は満月だ。

願わくば母艦の上に砕けなむ

その卯月の望月の頃

本当におやすみなさい。

父上、母上、おやすみなさい。

姉さん

淳子、知子おやすみなさい。

最後の眠りに就きます。

四月二十八日

今日は午前六時に起きて清々しい山頂の空気を吸った。今日やることは何もかもやり納めである。

搭乗員整列は午後二時、出発は午後三時過ぎである。

昔のことがいま俺の眼前を走馬燈のように順序不同に出て来る。楽しいこと、苦しいこと、俺の生活は僅か二十四年とは云いながら、決して七十、八十の老爺のそれに劣るまい。

要するに爆弾で死ぬ者もいる。自動車で刎ねられて死ぬものもいる。三月初めの東京空襲では、本所、深川、浅草と、七万人余も焼死したとか。死を問題にしないのが現代の常識となって来た。

外では蟬が鳴いている。

出撃のわが行祝う蟬しぐれ

昨日も慰問団が来たそう。ちょうど俺達は飛行場を整備していたが、彼等は帰るとき飛行場の端で、われわれの方を向いて土下座して拜んで成功を祈って行ったそう。

拝まれているのが俺だとはどう考えても不思議だ。そう聞かされると、必ず巧く命合せねば申し訳ないと思つた。お守りは胸のポケットに入れた。千

人針は腹に巻いた。これらは皆いまま
で俺を守ってくれた。それを必死行に
持って行くのは、皆の加護を捨てるよ
うに思ふか知れないが、俺として送り
難い。それで持って行かせて貰う。

淳子、知子からの人形も腰にさげて
行く。命中に付きあって貰う。

午前十一時、これから昼食をとって
飛行場へ行く。飛行機の整備で、もう
書く閑暇はない。

これでおさらばする。
乱筆、乱文はいつものことながら勘
弁乞う。

皆元気でゆこう。

大東亜戦争の必勝を信じ、

君達の多幸を祈り、

いままでの不孝をお詫びし、

さてさて俺はニッコリ笑って出撃す
る。

今夜は満月だ。沖繩本島の沖合いで
月見しながら、敵を物色し徐ろに突っ
込む。

勇敢に然も慎重に死んでみせる。

再拝

晟夫

大塚晟夫妹 富岡 知子

兄大塚晟夫の遺稿は、すでに「きけ
わだつみのこえ」に入っているものと、
私宛にとどけられたものと二冊でござ
います。

今までは、私宛のものはどなたに
もおみせしなかったのですけれど、こ
れを見直すたびに、ここに書かれたも
のが、大きく深く、暖かく感ぜられて、
やはり、このあたりで皆様のお目にふ
れて、兄の心を汲みとっていただくべ
きかと考えはじめました。

いまだに兄の筆になるこの遺稿をみ
るたびに涙はとめどなく、兄を惜しむ
気持ちで一ぱいです。

(貴様と俺……から抜粋)

全国戦没者追悼式における 首相の非常識な式辞

八月十五日戦没者慰霊の日に、靖国
神社に参拝もできぬ首相に、何の期待
も持てないが、夕刊の報ずる武道館に
おける首相の式辞を見て、何と非常識
なことかと呆れかへる。

全国戦没者とは戦死した英霊と無差
別爆撃などの犠牲になった人々を含ん
でいるが、これらの御霊に向って「ア
ジャの近隣諸国に対し多くの苦しみと
悲しみを与えたことを、謙虚に受け止

め深く反省している」と言っている。

これが英霊に向って言う言葉か、お前
達はアジャ近隣諸国に苦しみと悲しみ
を与えたとは、何たる言ひ草か。一命

を捨ててお国の為戦ってくれた英霊に
対し、感謝の一言半句もないのか。死
者を祀るのに、その功績をたたえるの
は当然のことであり、市井の葬儀にお
ける弔辞でもまかり通る道理である。

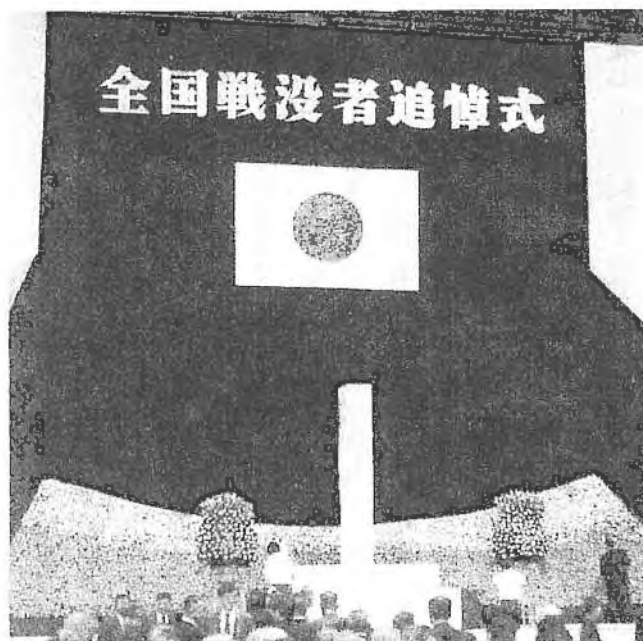
次は戦災に斃れた御霊に対してであ
るが、首相は年齢的にみて今次大戦に
個人として何の責任もない。それが責
任ある如く反省しているというからに
は、もう一步ふみ込んで、戦災を被る
ようになったことについ

て、戦災者の御霊にお詫
の一言でも言ったらどう
か。

抑々、近隣諸国に迷惑
をかけたというが、東亜
の諸国の中には、大東亜
戦争のお陰で植民地から
解放され、独立を獲得し
たと感謝している国は沢
山ある。東京裁判の呪縛
から脱却できないのは、
本場に情けないことだ。
戦没者の霊の中に特攻
の英霊もあることを思う
と、義憤はおさまらぬ。



第2 国分の慰霊公園



台湾高砂族日本兵の来日

「薫空挺隊始末記」贈呈

田中賢一

あけぼの会(代表門脇朝秀氏)では高砂族日本兵及びその遺家族10名を招待し、平地人であつて日本軍の一員だつた人も加り、一行21名が4月3日から7日まで我が国に滞在した。5日にはこの人達の強い希望で靖国神社に参拝し、その後九段会館で懇親会があつた。私は次のような「薫空挺隊始末記」と題する一文を印刷し、主催者の一人である植田弘氏(陸士57期)を介し、客人に贈呈した。

薫空挺隊始末記

一、薫空挺隊の特異性

今次大戦中に存在した日本の空挺部隊は、陸海軍別個に持っていたが、何れも正規の編制部隊だつた。海軍が持つたのは落下傘部隊であり、進攻作戦にあたり、17年1月11日にセレベス島のメナドに、ついで2月20日にチモール島のクーバンに、それぞれ落下傘降下作戦を行った。陸軍は初めは落下傘部隊だけで、17年2月14日にスマトラ島

のパレンバンに降下作戦を行った。18年の後半になると、編制部隊の比重は落下傘部隊よりもグライダー部隊の方へ移っていった。

註：編制部隊とは軍令によって定め

られた部隊をいう。

ところが薫空挺隊は編制部隊ではない。当時第14方面軍に所属していた遊撃第1中隊の一部と、第4航空軍に属する飛行第208戦隊の一部を組合せて現地で編成した部隊であり、落下傘降下の能力は持っていなかった。詳しくは後で述べる。

もう一つの特徴は、遊撃第1中隊の兵の大半は台湾の高砂族だつたので、薫空挺隊も主体は高砂族の兵士だつた。

二、遊撃中隊の編成と出動

17年末から18年にかけてガダルカナルで敗れ、ニューギニアで敗退を続けているとき、南方のジャングル内で遊撃戦を行う専門部隊を正式に編成することになった。

昭和18年12月24日、台湾軍は、遊撃第1中隊、同第2中隊の編成を命ぜられた。

この第1中隊の一部が後に「薫空挺隊」となるのだが、両中隊とも総人員一九二名、兵の人数は一五二名だつた。その一五二名の兵のうち、通信、衛生の特技者を除き、台湾の高砂族をもつ

て充てた。従つて高砂族の兵は一個中隊に一四〇名ほどいたと思われる。

高砂族とは台湾の先住民族だつたが、中国大陸から移住した所謂本島人に圧迫され、山の中に住むようになった。

日清戦争(一八九四—一九五五年)の結果、台湾は日本の領土となり、高砂族も日本国籍に編入されたが、初めは文化程度が低く、日本の統治に服さぬ部落もあつた。しかし逐年教化が進み、元来性質が純朴だったので、この頃は本島人よりも国策に協力的になつていた。

この高砂族も元を尋ねれば、オーストラリアかニューギニアあたりから、漂流して来た民族と言われ、台湾でも山の中で狩猟や原始的農業に従事しているのので、ジャングル内の行動に長じていた。

それに部落ごとの抗争を事とした先祖の血を受け、尚武の気性に富み、ジャングル内の遊撃戦兵士として、うつつの素質を持っていた。

そのようなことから、陸軍では高砂族を主体にしたジャングル内専門の遊撃部隊を作ることになった。先にも述べた通り、将校、下士官と通信手や衛生兵は内地人をもつて充てた。しかも将校、下士官の大部は、陸軍中野学校で遊撃戦を専攻してきた者だつた。

台北の台湾歩兵第一聯隊の補充隊で、

部隊を編成し、湖口の演習場で訓練に励んでいたが、19年5月愈々戦場に出ることになった。

5月28日高雄出港、このとき第2方面軍のれい下に入った。第2方面軍は西部ニューギニア以西、フィリピンとインドネシアの間にある地域を作戰区域としていた。

大本営では、初めニューギニアで両中隊を使う考だつたが、この頃は既に、ニューギニアは敵に抑えられ、戦闘の焦点はビアク島から更にモロタイ島、ハルマエラ島に移ろうとしていた。

両中隊は6月2日にマニラに上陸したが、第2中隊は間もなくハルマエラ島に移り、第1中隊はルソン島に残つた。第2中隊は9月から、モロタイ島で大活躍するのだが、これは主題から離れるので省略する。

ルソン島に残つた第1中隊は、リパで訓練していた。この頃初代隊長の神田少佐が病で倒れ、中隊付の尾山大尉(士52期)が隊長となつた。

三、遊撃第1中隊の起用

10月20日、敵がレイテに上陸、台湾沖航空戦の戦果を過信した大本営は、計画を急変変更しレイテ地上決戦にふみ切つた。

しかし、東部レイテの飛行場が敵に奪取されるや、彼我の航空戦力の差は

益々大きくなり、マニラからオルモックに向う輸送船は片っぱしから撃沈された。

マニラにある第14方面軍が、レイテに送り込んだ主な部隊は、第1師団、第26師団、第68旅団である。

第1師団の海上輸送は成功した。次の第26師団は11月10日、イビル海岸に到着したとき、空襲を受け人員は辛じて上陸したが装備一切を失った。次に送り込むべき第68旅団についても、その前途暗澹たるものがあった。

一方第4航空軍は、11月13日のマニラ大空襲をはじめ、累次の空襲によって甚大な損害を受けたが、戦意少しも衰えることなく、海軍に続いて敵艦に対する体当たり特攻を開始した。

この頃、内地から到着した第2挺進団(高千穂部隊)が、第4航空軍のれい下に入り、この部隊を、来月初に予定しているブラウエン攻撃に使う計画だった。

これとは別に、第4航空軍では、遊撃第1中隊の一部をモロタイ島の飛行場に強行着陸させ、敵基地を覆滅しようとして企図していた。

モロタイには、敵B-24爆撃機の基地があり、これがわが船団に対し猛威を逞しくするためである。

ところが、11月下旬になると、レイ

テの敵飛行場の整備が進み、モロタイよりもレイテの飛行場攻撃の方が急を要する状況になった。

レイテで敵が使っている飛行場は次の五つだった。(一)内の数字は、11月17日偵察結果の在機数。

タクロバン(約二〇〇機)
ブラウエン北(約一〇〇機)
ブラウエン南(約一〇〇機)

サンバプロ(少数) ドラッグ(少数)
そこで、第4航空軍では、遊撃第1中隊の一部を、飛行第208戦隊の零式輸送機(DC-3)に乗せ、ブラウエン

両飛行場に対し強行着陸攻撃を実施させることにした。
この命令が出されたのは、11月22日で、部隊名を「蕉空挺隊」、作戦名を「義号作戦」と呼んだ。

この頃、高千穂部隊の方は、司令部と挺進第3聯隊が、アンフェレスに到着しているもの、第4聯隊は海上輸送中、飛行戦隊は嘉義で練成中で、すぐに作戦開始できる状態ではなかった。

四、蕉空挺隊の編成

搭乗部隊の指揮官は中重男中尉(土55期)で、次の通り四個小隊になっており、第1小隊長は隊長が兼ねていた。

第一小隊 中重男中尉、甲斐将夫曹長、清水敏次伍長、石川正信、岡野弘

山下登、藤野秀夫、宮崎一郎、西村秀

夫、西山義一、河井東男、徳永正利、本田純一、西村照秋、上田初喜各上等兵

第二小隊 須永富蔵少尉、石田歳徳曹長、八木橋俊彦曹長、森田実、稲田茂、池田三郎、井手敏、草田良夫、有村※、結城文男、前田隆男、栗原一男、東山春夫、津村重行、田村幸吉各上等兵

第三小隊 川原英雄少尉、浜田新軍曹、金原庚鎮伍長、市川正義、大橋要

莫、高橋金三郎、伊藤秀雄、矢野秀雄、菊田光治、永野賢龍、田村幸徳、金川見洙、瀬ノ口信男、金重信男、三浦豊

之各上等兵
第四小隊 加来隆少尉、木下敏一軍曹、中村寛軍曹、藤田光三、甲斐巨、久川勝康、石井誠、斉藤信三郎、石建

美水、小野寺清一郎、実田健吉、林吉則、手島進、青木達一、保浦久良各上等兵
各上等兵は全員高砂族出身者、資料

にフルネームで出ていない者は靖国神社の御祭神名簿で調査してみたが、※印の人は有村春夫と有村繁敏の二名があり、どちらが蕉空挺隊に入ったのか不明。

飛行部隊の編隊長は桐村弘三中尉(少候22期)

桐村弘三中尉(少候22期)

田中正澄軍曹(少飛10)
二番機 五藤 武准尉(昭9)
北 史 軍曹(仙7)

三番機 大沢正弘中尉(士56期)
塚田弘治曹長(少飛5)

四番機 寺島近馬准尉(昭10)
高木 弘軍曹(少飛7)

使用機はDC-3(軍用名はC47)である。この輸送機は進攻作戦時鹵獲したもので、南方航空が使用していた。208戦隊は軽爆で当時ルソン島のリパにいたが、この人達はシンガポールに行き南方航空からDC-3を受取り、未習教育を受けてきた。

五、訓練、そして出撃
同盟通信の記者大森建道の著者「比島従軍日記」より該当箇所を引用させてもらう。

蕉空挺隊はリパ飛行場から奥に入った、ニッパヤシで葺いた粗末な二軒の小屋に全員ひっそりと合宿していた。さっそく隊長に会ったが、最初は「ここがよくわかりましたね」といって驚いていたが、当方の目的を知ると全將校を集めて詳しく話をしてくれた。

目指す飛行場はレイテ島のブラウエンか、タクロバンか、ドラッグか、この三方所のうち二カ所を選んで、それぞれ二機ずつ強行着陸をする。

訓練については到着以来も毎晩休む

訓練については到着以来も毎晩休む

発着が可能な程度にまでようやく修復した。一方、二〇八戦隊の整備班長青木中尉は、飛行場周辺の掩体内に完全偽装で隠してあるダグラス機の安否を気遣い、各機を巡視中、米機の投下した触れれば即刻爆破する万年筆爆弾に接触して重傷を負い、不幸にもまもなく戦死したという。

自分らは午後から空襲のすきをみて「薫部隊」宿舎を訪れ、写真をとったり取材したりしたが、兵士らは予想される今夜の出撃に備えて横になっている人が多かった。自分は中重男隊長の部屋で作戦とはまったく関係のない話をした。隊長の机には『文藝春秋』が一冊おかれ、横光利一の「旅愁」のところにしおりがはさまれていた。少し前の号だから、中尉が内地からもって来たものだろう。「こういうものがお好きですか」と聞くと、中尉は「ええ、まだ未完のままなので、生きていたら最後まで読めるのに、それができず残念です」とつぶやくように言って、はげしく微笑した。その顔を見て、本当に良い顔だなアとしみじみ思った。そしてこんな立派な若者をむざむざ殺す戦争の冷酷さを思った。

夕食後「薫部隊」は服装を改めたのち、全員で壮途の成功を祈って乾杯した。全員が爆発缶一キロと破甲爆雷六

七〇グラムを携行、それに軽機関銃という身軽な服装である。携行食糧は乾パン、コーヒー、ビスケット、バター、コンビーフなどの三日分である。

午後十時四十分、ダグラス四機は進路を南東方のレイテに向け出発していった。降るような深秋の星空の下、静かな出撃であった。長機を目視できるように各機は標識灯を点じたままである。その赤い尾翼灯が夜空にポーッとかすんでだんだんと遠ざかっていった。目指す敵飛行場に強行着陸できたら合図の青玉、赤玉の標識をあげるという約束だったので、自分たちは二時間ぐらい経過すればと、深夜の飛行場にじっと立ちつくし、それを確認のために飛んだ偵察機の帰還を待ったが、偵察機も戻らず、無電などどこからも、なんの連絡もなかった。深夜、夜露にぬれながら、自分らは無言で二〇八戦隊の兵舎に戻り、泊めてもらう。兵舎の大きな窓からは、澄み切った夜空にこぼれるような満天の星が眺められたが、時々流れ星の光の尾がスーッとその一隅を横切って、なにか不安な感じが高ぶって仕方がなかった。

六、決行

「比島従軍日記」引用終

義号作戦は、26日に決行された。中重夫中尉以下四十数名の薫空挺隊

は、第208戦隊桐村浩三中尉以下八名の操縦する輸送機四機に搭乗、夜間リパを離陸、ブラウエンに向った。

月齢は10日である。零時頃ブラウエンに着陸する計画だったが、その後の行動は不明な点が多い。

一機はバレンシヤに不時着し、塔乗人員は、第26師団と行動を共にしたことは確かだ。

零時過ぎ頃、オルモックの軍司令部から東方の山系を望むと、盛んに火の手が上るのが見えたというし、一時過ぎ、ブラウエン上空にわが偵察機が進入したが、いつもの激しい対空砲火はなかったという。

これだけの徴候では、ブラウエン飛行場に着陸成功し、戦果を挙げたと断定することはできない。

米軍の記録によれば、ドラック海岸附近に二機着陸し、乗員が闇の中に消えて行ったという。多分これが、脊陵山脈を越えた三機のうちの二機であろう。

その人々がどのような活躍をしたのか、残念ながら詳かでない。

敵飛行場を襲撃した後、ダカミ附近に潜行し、第16師団に合流しよう命

ぜられていた。ジャングル内の行動に長じていた高砂族の兵だったから、何人かはダガミまで辿りついたのかも知

れない。第16師団は、義号作戦から十日後にブラウエン北飛行場に突入した。そのとき高千穂部隊が飛行場に降下し、百人以上の者が第16師団に合流しているが、この人々の最後も明らかでないほどだから、二、三十名の最後は知るすべもない。

それほど、レイテで戦った部隊の末路は悲惨だった。

最後は全員戦死したにしても、どんな活躍をしたのか、——当時のフィリピン駐在村田大使の日記が、村田省蔵遺稿比島日記と題し出版されている。これを見ると、11月13日に寺内元帥を訪門したとき、航空特攻や人間魚雷と並んで、この高砂兵の部隊のことが話題に出たように書いてある。

必要あれば爆薬を背負い敵中に突入するのだと。

註 南方軍総司令部は、この頃マニラにあり、その後間もなくサイゴンに移った。

これほどの意気込みを持った部隊だから、唯では死ななかつたらうと思っただけである。

それでは、薫空挺隊を差し出したあの遊撃第一中隊はどうしたのか。

三陣に分れてマニラ発、船でレイテに向った。

11月28日 豊田准尉以下二八名

11月30日 尾山隊長以下主力

12月1日 茶園曹長以下二一名

この中で、第二陣の尾山大尉の率いる主力は、翌12月1日、カモテス海で空襲を受け沈没、全員戦死。

第一陣と第三陣はイピルに上陸、第26師団に配属され、オルモック附近で戦闘したらしい。

戦後、茶園曹長と高砂兵一名が帰還したが、茶園曹長も既に故人となり、これ以上のことはわからない。

遠い先祖以来日本の国に生を享けた者が、国家非常の際命を捨てるは当然のこと、これは世界的通念でもある。しかし、国家間の勢力の変遷で一時的に日本人となった高砂族の兵士が、このように名もなく死に、日本人の記憶から消えてゆくのは、申し訳ないことである。

厚生省援護局に保管されている名簿をみると、当人は日本名で記載されているが、留守担当者欄は片仮名の名前が記入されている。

なお靖国神社には合祀されているが、そのことについて国民に広く周知してもらわねばならぬ。



民族衣装で



来日した台湾の人々

日本の軍歌を高唱

あけぼの会が作成した
パンフレットより

台湾高砂義勇隊について

高砂挺身報国隊

昭和16年12月8日、大東亜戦争が勃発すると、台湾軍はバシー海峡を越えて、ルソン島へ進攻しました。この時高砂族に対し軍需品の輸送に従事する軍夫を募集した処、約五〇〇〇人の応募者がありました。この中から五〇〇名を選んで「高砂挺身報国隊」を編成しました。昭和17年3月22日この隊は高雄よりルソン島に向かいコレヒドール要塞戦、バター半島作戦に従事しました。昭和17年9月29日、比島派遣軍司令官田中静彦中将の賞状には高砂挺身報国隊と誌されています。しかしこの報国隊は最南部のパイワン族の一〇〇名を残して、約四〇〇名は台湾に凱旋しました。

残った一〇〇名は、昭和17年7月ミランダオ島ダバオに移住した後、独立工兵第15連隊に配属され、7月21日ニューギニア北岸のバサボアに上陸し、オーエンスタンレー山脈を越えて陸路ポートモレスビーに向かい、南海支隊の先鋒を務めました。

昭和18年5月15日、ニューギニア方面陸軍最高司令官名(氏名なし)の賞

詞には、宛名が第一次高砂義勇隊となっていて、昭和17年2月、南海支隊に配属されて、ニューギニアに上陸以来、一時はポートモレスビーに迫ったが、後にニューギニア北岸で行われた戦闘に抜群の功績を挙げたと誌されています。

高砂義勇隊はその後第八回迄募集され、主としてニューギニアで善戦して終戦を迎えました。

陸軍特別志願兵

昭和18年10月15日高砂青年五〇〇名を、始めから特別志願兵として徴募し、訓練を施しました。この中には第一回高砂挺身隊員も多数含まれていました。昭和19年3月、高雄発マニラへ、後第二遊撃隊としてモロタイ島へ、他の一隊は第一遊撃隊として、末期のレイテ戦線に、蕪空挺隊として投入され、全員散華して一人の生還者もいません。今回来訪者の宮田武男(アミ族)と岡田耕治(ピューマ族)の所属する台湾軍第二遊撃隊は高砂族五〇〇名で、隊長川島威伸少佐、幹部全員は内地人でした。

井上信高二等飛行兵曹の遺書と出撃前夜の心情

「白雲にのりて君還りませ」

(第二国分の記)より

但し標題は編者のつけたもの

井上 信 高 18歳

甲飛13期 二等飛行兵曹

第三草薙隊 名古屋空

昭和20年4月28日沖繩沖敵艦船に

特攻出撃戦死

九九艦爆搭乗員

遺書

父上様 母上様

乱筆御免下さい。十八才のこの年まで信高の面倒を見て戴きまして、誠に有難う御座居ました。

私もいよいよ軍人の最高名誉の特攻隊に加わり出撃することになりました。其の間何一ツお知らせ致すことが出来なかつたのを残念に思っていますが、これも軍事のこと止むをえません。然し信高は悔んだりはして居りません。今迄お世話になった父母様を始めとし、この私を一人前として戴いた上官の方々と周囲の人の御恩で胸が一杯です。

どうか大東亜戦争の勝抜く日迄達者でいて下さい。私も体はなくなっても

魂だけは残って父母上様の元氣なお顔を靖国の空より拝見させて戴きます。

いよいよこれが最後です。色々書きたいのですが、どれから書いてよいやらわかりません。

いよいよ明日は沖繩へ飛び体当りです。私も弟達の後に続くを信じ、又必勝を信じ悠久の大義に殉じます。白木の箱が届いたならば、泣かずに誓めて下さい。呉々もお願い致します。

何一つ孝行は出来ませんでした。後には兄上に頼みました。同封する写真は出撃する直前に撮りました。張切っています。何卒御安心下さい。尚きたない爪ですが一緒にに入れておきます。

では呉々も御身を大切に御長寿の程を。

近所及親戚の方々に宜しく 御免
昭和二十年四月二十七日 信高拝

昭和二十年四月二十七日(出撃前日) 隼人町の鹿兒島神宮にて偶然一緒になった鹿兒島県始良郡溝辺村有川、松田ヒデさんに託した一枚の便箋に鉛筆で走り書きした井上信高二飛曹の最後の手紙である。

書簡

鶴丸リツ氏のたより

(井上信高様の御両親様へ)

初めてでございます。只今、御息息信高様の尊い出撃の飛行機を、長い竹の先に日の丸の旗を結び付けてあふれ落ちる涙と共に打ち振りお見送り申し上げました。

昨夜でございました。「小母さんたちは、お庭で井上さんが見えなくなっても、日の丸の旗を一生懸命振りまわ」と申し上げました。「それじゃ小母さん、僕たちは小母さんの処の空を低空で飛びます」と約束して下さったので御座居ます。

出撃はお昼過ぎとの言葉に、正午を過ぎますと家中は勿論、お隣りも、その次も、只々西の方の山上の飛行場からの爆音を今か今かとお待ちして居りました。三時が鳴りますと、間もなく信高様方の飛行機が一機、二機と私宅の真上を低く勇ましく大きい爆音で南の空へ飛んで下さったのでございます。口をすすぎ、身を清めました。神前に成功をお祈りして、御両親様に種々とお聞きして頂き度、拙いペンをとりました。どうぞお聞き下さいませ。

信高様にはじめてお目にかかりましたのは、去る二十五日の夕方四時でございました。すぐ隣りに住んで居りま

す主人の姉宅を訪ねて見えた三人の方

の、初めて見ます特攻隊の御服装に早や胸を打たれ、義姉の生憎の留守のままに、私宅に来て頂いたので御座居ます。その夜は十二時過ぎまでお話し申し上げたり、艦爆の歌や、体当りの歌などを唄って頂きました。後十数時間のお命の方々とはどうしても思えませんが、淡々としてあくまで無邪気で面白い信高様のお姿でございました。

でも体当りの歌の
いよいよこれが最後です。父様母様お元気で
白木の箱がとどいたら、泣かずに
ほめて下さいね、

お三人で合唱なさる時などは、泣けて泣けて仕方が御座居ませんでした。晴の出撃までに又外出が叶いましたら、もう一度どうぞ、お顔を見せて下さいね。とお願ひ申し上げましたところ、昨夜、当地は連続の空襲で電灯もつきませんので早く床に就いて居りましたら、十一時過ぎに「小母さん」と言う声に飛び起きたのです。そうしたらまあ先日よりも多く五人、月の光に濡れて、お庭に立っていられるでは御座居ませんか。皆様遠い遠い一里余りのお山の上から、そっと抜け出して、わざわざ最後の別れに来て頂きました。御芳志の勿体なさに、有難さに私は暫

く言葉も出ませんでした。お察し下さいませ。

お文は、私のこのペンで、お縁で、明るい月の光で認められたので御座居ます。おふくろさんがやはり懐かしいなあとおっしゃる度に、皆様も「そうだ、やはりおふくろが恋しいな」と遙か月の彼方のお空を縁に寝ころんで眺めつつ想いを故郷に馳せていられるお姿を、どのような気持で眺めておられましたか。私共大人も及ばぬ、大きな立派な、お働きをなさって、平気でお国に殉じて下さる信高様もやはり、まだまだお乳恋しい十八才の少年で御座居ました。大事な体ですから、少しでもお休みなさいね、とふとんをのべて上げますと、「あーふとんはいいなあ」と喜ばれて、「小母さん、四時には起して下さいよ」とおっしゃりつつ、暫くの間は寝ながら話したり歌ったりしていられたが、いつとはなしに安らかにおねむりになりました。

もう一時で御座居ました。皆様のお寝顔に、お寝息、又涙があふれて仕方が御座居ませんでした。

月の明りをたよりに、小豆を炊いてお赤飯と、粗末ながら心を込めてお吸物も出来上りました。時計の針の今朝ほど早く進むように思えた事は御座居ません。四時迄よく眠っていられるの

を本当に胸が痛む想いでお起し申し上げ、お酒もございませぬので熱いお茶を差上げて、心からの御出発をお祝い申し上げました。お山の飛行場までも一緒にについてゆきたい、私共が少しお送り申し上げますと、「冷えるからもういいですよ」と優しいことをおっしゃりつつ、お姿は遂に町の角に見えなくなりました。

かねがね、特攻隊の方々を拝まして頂きたく思っ居りました私にとって、二、三人でも只真心を込めて暫くの間でも、お世話させて頂きました事は、ほんとうに心からの喜びで御座居ました。うれしい有難い事で御座居ました。

初めてお逢い申し上げました夜、皆様のお顔は一度どこかで見たようなお顔ですけど、初めて拝見するようでないとお申し上げましたら、信高様が「小母さん、これも前世ですよ、前世でお逢いしているのですよ」と面白そうにおっしゃるのです。「そうですね。ほんとうに」と申し上げつつ袖ふり合うも他生の縁なればこそと思う事で御座居ました。

今日は本当に美しい新緑もまばゆいばかりの上天気で御息方の御出撃にふさわしい日で御座居ました。十七才の愚息長男が屋根に括げました即製の大きい日の丸が空から見えま

した事か。私共の打振る日の丸が判って頂きました事か。例え判って頂きませんでも、私共も石にかじりついても頑張つてこの戦いにきつと、きつと勝ちますから、どうぞ御心安らかに征つて下さいませと、心の中にお誓い申し上げる事でした。

もう四時過ぎ、今どこの海の上を飛んでいられることやらなど想いつつ認めまして涙ばかりこぼれまして、乱文乱筆何卒御判読下さいませ。

最後に信高様のような立派な方をお産みお育て下さいました御両親様に、深い深い心からの尊敬と感謝を捧げます。

では皆様、御一緒にがんばりましょう。

御機嫌よろしう

さようなら

鶴丸リッ

四月二十八日夕

井上高太郎様

御奥様

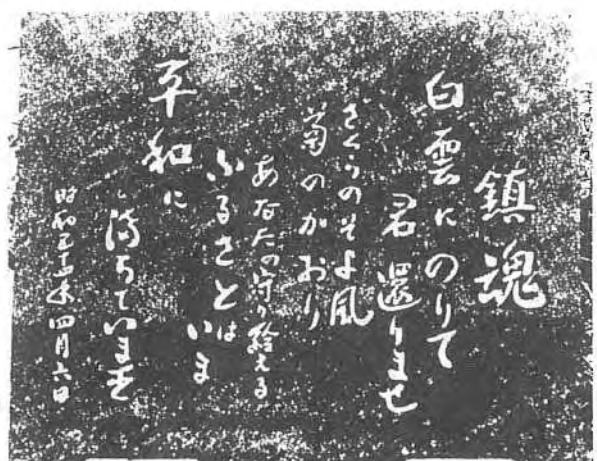
昭和二十年四月二十八日、第三草薙隊として国分第二基地(十三塚原)から出撃した、井上信高二飛曹の遺族に

送った鹿児島始良郡隼人町の鶴丸リッ氏の便りである。特攻隊の状況や、当時の国民一般の特攻隊への心象の実情が、よくわかる書簡である。



出撃前の九九艦爆

右 吉田弘資候補生(操縦)
左 井上信高二飛曹(偵察)



第二国分の慰霊碑

大西瀧治郎の思想を承けて

命令によって初めて航空特攻を出したのは、第一航空艦隊司令長官大西瀧治郎である。彼が神風特攻隊を發進させた目的は、捷一号作戦の要をなす栗田艦隊レイテ湾突入を成功させる為、敵空母の甲板を使用不能にしようとするに於った。零戦に250キロ爆弾を載んで体当りしたとて、空母を撃沈できる筈はない。一時的に飛行甲板を使えなくするのが狙いだった。極めて合理的な考である。しかし、栗田艦隊の突入断念反転によって、この特攻作戦は無為に終るのであるが、それはさておき、その後も敵艦に対する体当り特攻を続行した。

その実行、これが日本を救う原動力なのだ”この言葉が一字一句大西長官の言かどうかはわからぬが、その気持がなければ、日毎に傾きゆく戦局の中で、飽くまで特攻作戦を続けることはできなかったであろう。

栗田艦隊突入を成功させる為、敵空母の飛行甲板を破壊することを形而下の目的とするならば、後世の青年を振い立たせるのは形而上の目的と言わなければならない。平和ボケした現代人は言うだろう「後世を振り立たせる為は無為に特攻にかり立てるなど、飛んでもないことだ」と。だから大西長官は言った「わが声価は、棺を覆って定まらず、百年ののち、また知己なからんとす」と。戦やんで半世紀、大西長官の求めた

特攻の形而上の目的は、今の世にも必須である。連日の新聞の報ずるところ、政治家にも庶民にも醜状ばかり目につく。時代が違っても往時の特攻精神が僅かでも存すれば、世の中はもっともっとよくなるであろう。世にそれを語り伝えるのが、我々の役目である。

物語り風に書かれたある書物によれば、特攻を継続すれば戦争に勝てるのか、という新聞記者の質問に対し、「ここで青年が起たなければ、日本は滅びる。しかし青年達が国難に殉じていかに戦ったかという歴史を記憶する限り、日本と日本人は滅びないであろう」と答えたという。また次のようにも言ったという「日本のこの危機を救うる者は大臣でもなけりや、軍令部総長でも司令長官でもない。三十歳以下二十五歳までの、或いはそれ以下の若い人々で、この人達の体当り精神と

終戦の翌日、大西提督は自決するのであるが、死に臨み後の世をどのように予測されておられたであろうか。

遺書

特攻隊の英霊に曰す。善く戦いたり、深謝す。最後の勝利を信じつつ肉弾として散華せり。然れ共其の信念は遂に達成し得ざるに至れり。

吾死を以て旧部下の英霊と其の遺族に謝せんとす。

次に一般青壮年に告ぐ。

我が死にして、軽挙は利敵行為なるを思い、

聖旨に副い奉り、自重忍苦するの誠ともならば幸なり、

隠忍するとも日本人たるの矜持を失う勿れ。諸子は国の寶なり。平時に処し、猶克く特攻精神を堅持し、日本民族の福祉と世界人類の和平の為、最善を尽せよ

海軍中將 大西瀧治郎

協会発行の書物等の頒布

戦没特攻隊員の精神を後世に語り伝えるため、協会では次の書籍等を作成して頒布しております。

会員の皆様、これらを座右に備えると共に、身近な人に訴える資料として活用して下さい。電話・葉書・FAXでお申越下されば、郵便払込用紙を同封して現品をお送り致します。頒価は送料別。

〔小冊子〕

○遺書遺詠に偲ぶ特攻隊員の心情

A 5版 60ページ 六〇〇円

○特攻隊員の日記

A 5版 70ページ 七〇〇円

〔単行本〕

○B-29との戦

A 5版 164ページ 一、五〇〇円

○特攻隊遺詠集

A 5版 221ページ 二、〇〇〇円

○愛は終りなく

沖繩洋上に散華した特攻隊員と將來を約した一女性の回想記

A 5版 209ページ 一、五〇〇円

〔ビデオ〕第一御楯隊と義烈空挺隊

二本立で約五〇分 五、〇〇〇円



義烈空挺隊の遺墨に思う②

田中賢一

介しよう。

サイパン攻撃の為挺進第

1聯隊で編成した奥山隊が、

到着したのは、19年12月7

会報39号(11年5月)で、第3独立飛行隊の陸士57期五名の人達を紹介した。3独飛の人達のはまだ残っているが追而掲載することにし、今回は奥山隊のうちで中野学校出身者の分を紹介

日である。そのときは奥山隊長以下186名だった。豊岡に来て教導航空軍の参謀から具体的な任務を示され訓練を始めたとき、参謀本部の指示で中野学校から次の10名が加り、186名となった。

少尉 辻岡 創 中野六丙

石山俊夫

梶原哲己 幹候10期

渡辺裕輔

原田宣章

棟方哲三

阿部忠秋

熊倉順策

菅野敏蔵

酒井武行

梶原以下熊倉までの六人の少尉は幹

候10期で、中野学校二俣分校を卒業してすぐに着任した。辻岡、石山二人の少尉は前の六人より先輩で、中野学校の本校から来たというが、幹候の期別等不詳である。二名の下士官は通信の特技者で、中野学校の本校から来た。これら一〇名のうち熊倉少尉が、後に沖繩に向かったとき不時着生残ったので、貴重な史実が伝わった。

骨は砕けぬ
魂は
白く
ついでに
辻岡少尉



吾々の屍を
踏み越へて
進め
昭和二十年一月十七日
石山少尉



魁を梅を此の身に
散るゆゑ
後に續かん
出陣の日
梶原少尉



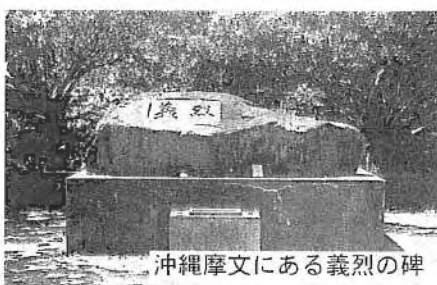
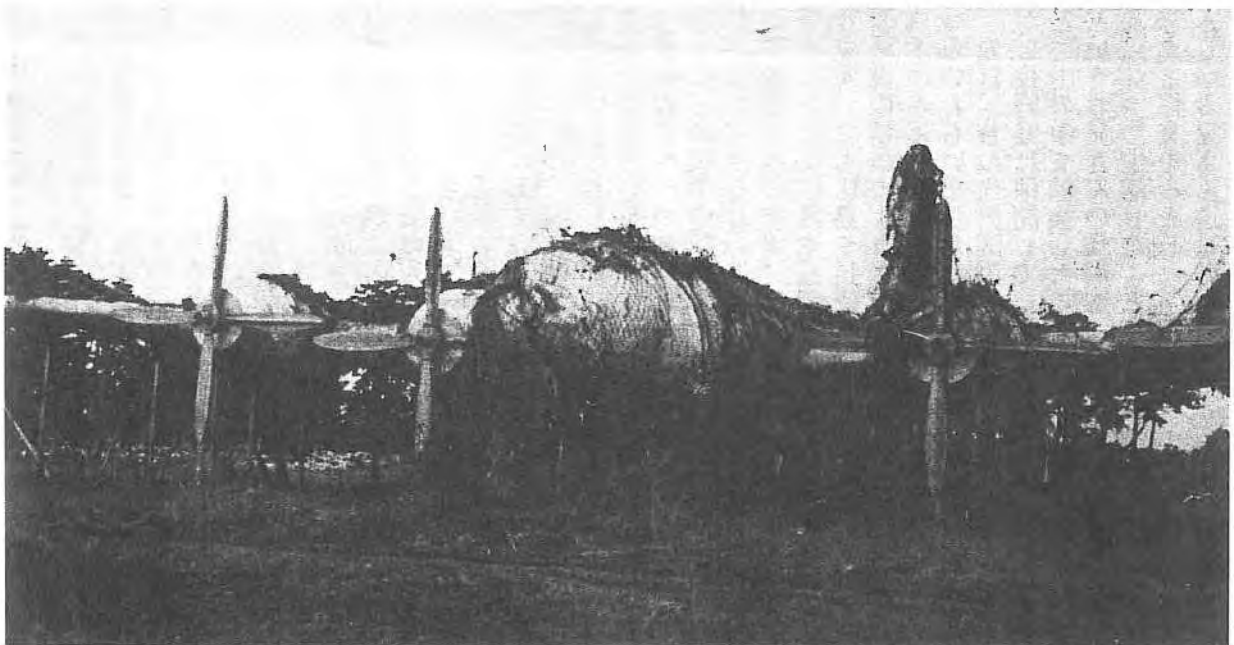
平心凡々
元旦
陸軍少尉
渡辺旅団



散れく散るな
ハト散れハトぬ
阿部少尉

君が代はちよろづよと
いと春し
白ひたろふ若ごら花
棟オ少尉

天皇の皇祚護
弘く道は
永久に安んず
何朽まじ
原田少尉



沖縄摩文にある義烈の碑

この人達はサイパンまで同行し、その後は潜入謀者になるのが任務だったが、先ずはB29を爆破する戦闘をやるうということになり、奥山隊の将兵と一緒に訓練した。上の写真は訓練に使ったB29の実大模型で、終戦まで豊岡(現人間基地)に残っていた。進駐して来た米軍が撮ったもの。中野組10名はサイパン攻撃が取り止めになってからも配属のまま、最後は沖縄に向い10人のうち9名が戦死した。

遺詠と遺墨

冒頭記事の世田谷特攻観音の年次法要で次の献吟があった。

第一護皇白鷺隊 海田茂雄

昭和二十年四月六日

沖繩周辺洋上にて戦死

いさぎよく散るこそ武士の道と知れ

恵みを受けし 君が御為に

この度、弟海田武殿より礼状に添えて故人遺墨の写真が提供された。



第一護皇白鷺隊 97艦攻串良発進

操縦 海田茂雄少尉 予学13

偵察 俵 一夢少尉 予学13

通信 渡辺與四三 2 装甲飛12



串良の碑

会報44号の訂正

〔対談〕生き残り特攻隊員の心境 3 ページ下段豊廣氏発言内容中リングエン泊地とあるはリング泊地に訂正。

〔小学生の作文〕

助けあう世界に

シドニーオリンピックの開会式をテレビで見ていた時です。急に会場の人達が全員立ち上がって入場してきたその国の選手達に大きな拍手を送りました。どうしてなんだらうと不思議に思っているとお父さんは、「日本のとなりの朝せん半島で戦争があり、38度線というところから、同じ国の人たちなのに別れて、長い間交流ができないでいたこと。それがこの二〇〇〇年オリピックで北と南の人たちが一緒に手をつないで入場行進できるところまで来た」ことを話してくれました。私はそれで会場に来ている世界の人達は喜んでいたんだ、同じ朝せん半島の人たちはとでもうれいだろうなあ、私もよかったと思いうれしくなりました。

教科書で「一つの花」や「石うすの歌」などの戦争の話があります。かなしい気持、さみしい気持、かわいそうになる読みものです。毎年夏休みになるとテレビに広島や長崎のことがうつります。でも広島や長崎だけでなく、教科書の物語のように、日本の戦争で日本のみんなが苦しんだり悲しんだり、つらいおもいをしたと思います。

先日、昔の代沢国民学校の子ども達も、長野県に疎開して(学童疎開のこと)山の中で勉強したことや、特攻隊というお兄さんの兵隊さんと一緒に仲よくなって生活したこと、その時の写真と作文をみました。そしてそのやさしいお兄さん達は九州の基地から南の空に飛んで行ってそれっきり、帰ってこなかったそうです。

戦争は国と国のけんかです。けんかはこわいです。国と国とのけんかは、人が死んでとてもいやです。だいきらいです。私はぜひ一度九州の南に行つてやさしいお兄さんたちと、うつっている代沢国民学校の子たちの写真を見たいと思います。そして、おかげさまで今の日本が平和であることを報告したいと思います。今、私のいる代沢小学校は山形県の舟形小学校と二泊三日づつ、交流学习をしています。13年続いています。夏の7月に5年生が全員行き、舟形のお友達のお家に泊まり楽しい生活を送りました。今月の27日に今度は、下北沢に舟形小学校の5年生がやってきます。全校でお迎えし、街を案内したり世界の4大文明展を見学したりします。

私はその地方や、その生活や文化や、人と人の交流をしながら、気持ちをおかしく合おうと思います。私は舟形ともオリピックのように、世界の国の人達ともけんかをしないで仲よくし、助けあう平和な21世紀にしていきたいと思っています。平成12年9月23日

東京都世田谷区立代沢小学校
6年1組 相馬 史佳

この小学生の作文をみてこの学校における教育の一面を垣間見ることができ。九州の南、おそらく知覧あたりのことであろうが、行ってみたいと言っている。特攻基地の記念館をみて、国に殉じた特攻隊員の精神を知り、平和は念じただけでは得られないということを肝に銘じてもらわねばならぬ。